

## 日本思想史学から見る近現代の天皇

尾原 宏之

天皇自身が退位の意向を示唆した二〇一六年の「お気持ち」表明以降、天皇とその制度をめぐってさまざまな議論が交わされてきた。日本国憲法下で象徴天皇がみずからの意志によって退位することは可能なのか。天皇が担ってきた「公務」のあり方は適切なものだったのか。退位後の天皇・皇后はいかなる名称で呼ばれるのか。安定的な皇位継承が危機に瀕する中で、「女性天皇」「女系天皇」「女性宮家」は認められるべきか。あるいは旧皇族を復籍させるべきか。二〇一九年五月の代替わり以降も、宮家の結婚に関する動向をめぐって憶測が飛び交っている。その中には天皇・皇族に自由はあるか、あるいは天皇・皇族にとつて徳・不徳とはなにかといった古典的な問いを惹起しそうな問題までも含まれている。

さて、現在進行形でマスメディアの好餌となっているアジェンダをいちいち列挙したのは、本年度のシンポジウムのテーマが時事的な関心に突き動かされて単純に選定されたことを示したいからではない。これらの天皇と皇室に対する一般的関心が、「天皇という存在は歴史上どのように捉えられてきたのか」「天皇とはどのような存在であるべきと考えられてきたのか」という、日本思想史学の本領ともいえるべき問いと探究に深く関わっているからである。長い年月に生み出されてきた関連業績は、それこそ枚挙にいとまがない。冒頭にかかげ

たようなメディアによって設定されるアジェンダについても、日本思想史学が生み出してきた豊かな成果が本来もっと参照されてしかるべきだと思われる。

当初、大会実行委員会ではひろく古代・中世・近世をも視野に入れたテーマ設定を検討したが、議論の拡散を懸念したこと、また、先にあげた問題意識をより明確にできることなどから、大会委員会での協議を経て「日本思想史学から見る近現代の天皇」に決定した。

以下、多くの会員にとっては既知に属するであろうが、発表およびディスカッションを依頼した方々について簡単に記し、シンポジウム報告の導入としたい。

第一の発表者には、会外から名古屋大学の河西秀哉氏をお招きした。象徴天皇制の成立と展開について多くの研究業績を持つ河西氏は、メディアを通してその知見を積極的に社会に還元している研究者でもある。その意味で、当初からの企画意図を具現化するご発表が期待される。

第二の発表は、戦前のコミニニストから見た天皇とその制度について、黒川伊織会員にお願いした。今日も一般的に使われる「天皇制」という言葉は、戦前のコミニニズムに由来する。支配構造として天皇制の全体像を捉えようとする視座が後景に退いている現在だからこそ、コミニニストの天皇制論の軌跡は大いに再検討する価値があると考えられる。

第三の発表は、「皇后」という存在を通して見た天皇について、小平美香会員にお願いした。周知の通り、現代の天皇をめぐる諸問題をジェンダーの視点抜きに語ることはできない。本シンポジウムにその視点を導入するとともに、祭祀の問題を通して近現代とそれ以前を架橋することが期待される。

討論者は、近代日本の国体論や神道に関する課題に取り組んできた昆野伸幸会員、日本とアジアの関係を捉えるパースペクティブの中で天皇や王権についての論考を発表してきた米谷匡史会員のお二人に依頼した。司会は、大谷栄一大会委員が務めた。

昨今、各種学会の司会・発表者・討論者の選定において、ジェンダーバランスの考慮が強く求められるようになった。男性だけのパネルは「マネル」(Manel=Man+Panel)と呼ばれ、指弾の対象になっている。本シンポ

ジウムについては、当該テーマについてすぐれた研究業績を持つ会員を探しているうちに「マネル」は回避されていたというのが実情である。もちろん、運営側の努力がまだまだ足りないという叱責は甘受しなくてはならない。個別発表、「思想史の対話」を含め、学会運営のあり方について今後とも真摯な模索を続けていく必要がある。

なお本年度の大会は学会史上初のオンライン開催となった。数多くの不手際があったことを大会実行委員会としてお詫び申し上げる。現在の新型コロナウイルスの流行は予断を許さず、来年度以降の大会もオンライン開催を検討しなければならないだろう。より円滑で充実した大会となるよう、今回の経験を共有していきたい。

(甲南大学准教授)